厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
分担研究報告書

令和7年度がん診療連携拠点病院等の職員への「障害者対応」E-learning教材の受講者評価に関する研究

研究代表者　八巻知香子　国立がん研究センター　がん対策研究所 がん情報提供部　部長
研究分担者　高山　亨太　国立がん研究センター　日本社会事業大学社会事業研究所　研究員
研究協力者　羽山　慎亮　国立がん研究センター　がん対策研究所　がん情報提供部　特任研究員
研究協力者　甲斐　更紗　国立がん研究センター　がん対策研究所　がん情報提供部　特任研究員

研究要旨

本研究では、がん対策推進基本計画でも障害のある人への情報提供や医療へのアクセスの重要性が指摘されているが、がん診療連携拠点病院での体制は十分とは言えない。そこで、がん診療連携拠点病院等への研修プログラムとして、障害者のニーズや配慮を伝えるための、合計約46分の「全体概要」「視覚障害」「聴覚障害」「知的障害」の構成によるE-learning教材を令和5年に開発した。令和6年も継続し、がん相談支援業務に従事する相談員をはじめ医療者がE-learning受講により、障害者が来院際の対応方法や障害者のニーズを想像して適切な対応をするための知識を得て、支援に活かすことができるかについてE-learning受講後のアンケート調査にて評価を行った。215名が受講し、117名から回答があった（回答率54.4%）。受講者による評価の結果、受講者の9割以上が「とても理解しやすかった」「理解しやすかった」と回答しており、E-learning教材内容は日常の業務に役に立てられそうかについて、9割以上が「とても役に立つ」「まあまあ役に立つ」との回答であった。このことから、障害者のニーズを想像して対応するE-learning教材内容であると評価され、継続的持続可能な教材であることが窺えた。精神疾患・精神障害者への対応に戸惑った回答者も多く、精神障害者への対応に必要な事項をまとめた教材開発や、E-learning教材を更に継続的に普及させる方法を検討する必要がある。

A. 研究目的

2018 年の第 3 期以降、がん対策推進基本計画でも障害のある人への情報提供や医療へのアクセスの重要性など、障害者も含めた誰一人取り残さないがん対策の推進が指摘されているが、がん診療連携拠点病院での障害者へのがん医療受診などの支援体制は十分とは言えない。そこで、がん診療連携拠点病院等の職員への研修プログラムとして、障害者のニーズや配慮を伝えるため、総計約 46 分の「全体概要」「視覚障害」「聴覚障害」「知的障害」の構成による E-learning 教材を開発した（令和 5 年度)。がん相談支援業務に従事する相談員をはじめ医療者が、どこでもいつでも受講できる E-learning 受講により、障害者のニーズを想像しながら適切な対応をするための知識を得て支援に活かすことができるかについて、2025 年度も継続的に E-learning を実施し、E-learning 受講後のアンケート調査にて評価を行った。

B. 研究方法

【調査期間】

2025 年 7 月から 2026 年 2 月 28 日

【対象者】

がん診療連携拠点病院に所属し、がん相談支援業務に従事する者

【受講・アンケート回答方法】

がん相談支援センター相談員研修の Web サイトにログインして受講後にアンケート調査に回答（任意）

【アンケート項目】

全 12 項目（6 件法選択・5 件法選択・複数選択回答・自由記述回答）

＜基本属性・内容、障害者への対応経験など＞

1） 所属機関の種別

2） 職種

3） （所属機関への）障害者の来院の頻度（6 件法: 頻繁にある（ほぼ毎日）・時々ある（週に 2，3 人程度）・稀にある（月に 2，3 人程度）・めったにない（年に 2，3 人程度）・わからない・その他（自由記述回答））

4）（回答者自身の）障害者への対応経験の有無

5）（回答者自身の）来院された障害者への対応にて困ったことの有無

6）あなた自身が来院際での困ったことがある障害者の障害種

7） 6）で回答した障害者の障害種にて、「困ったり、戸惑ったりしたことがある」場合の具体的な内容（自由記述）

＜E-learning 教材内容の評価＞

8）（E-learning 教材内容の）理解しやすさ（5 件法：とても理解しやすかった・理解しやすかった・どちらとも言えない・やや理解しにくかった・理解しにくかった）

9） 知らないことを新しく知ることができたか（5 件法：新たに得る知識がとても多かった・新たに知る知識がそれなりにあった・新たに得る知識　が少しあった・新たに得る知識があまりなかった・新たに得る知識は全くなかった）

10）（E-learning 教材）内容は日常の業務に役に立てられそうか（5 件法：とても役に立つと思う・まあまあ役に立つと思う・どちらともいえない・あまり役に立たないと思う・全く役に立たないと思う）

11）E-learning 研修受講にて、参考になったこと、日頃の業務に活かせると感じたこと（自由記術）

12）障害のある患者さんへの対応をテーマとした研修についての意見・要望など（自由記述）

【回答内容の分析】

各項目の単純集計及び、自由記述内容は意味内容の類似性に沿って整理した。

【受講者数・回答率】

215 名が受講し、117 名から回答があった（回答率 54.4%）。

（倫理面への配慮）

本研究は、教育プログラムの評価をめざした研究であり、人を対象とした医学系研究ではない。実施にあたっては、本プログラムが厚生労働科学研究費の活動の一環として実施していること、アンケートは任意であり、プログラムの評価・改善に活用することを示し、同意を得た人にアンケートの回答を依頼した。

C. 研究結果

＜回答者の属性（所属機関の種別・職種、障害者への対応経験など）＞

1）所属機関の種別について、地域がん診療連携拠点 73名（62.4%）が最も多かった（図1）。回答者の職種について、社会福祉士が26名（22.2%）、看護師が26名（22.2%）と最も多く、その次に多かったのが、がん専門相談員・看護師が24名（20.5%）であった（図2）。

2）（所属機関への）障害者の来院の頻度：受講者の所属機関への障害者の来院頻度は「稀にある（月２，3人程度）が最多（34名、29.8%）であり、全体の4分の1ほどであった（図3）。

3）（回答者自身の）障害者への対応経験の有無：障害者への対応経験者が9割近くであった（図4）。

4）障害者の来院時で困ったり戸惑ったりしたことの有無にて、困ったり戸惑ったりしたという回答者が7割以上の90名（76.9%）で、最も多かった（図5）。

5）（回答者自身の）対応に最も困った障害者の障害種について、精神障害（統合失調症、うつ病など）の方が最多の35名（29.9%）であった（図6）。

6)「困ったり、戸惑ったことがある」場合の具体的な内容について、69件の自由記述内容が寄せられた。

＜E-learning教材内容の評価＞

7)E-learning内容の理解しやすさ:全員が「とても理解しやすかった／理解しやすかった」と回答しており、「とても理解しやすかった」が65名で最多（55.6%）であった（図7）。

8)知らないことを新しく知ることができたか:9割以上が「新たに得る知識がとても多かった／それなりにあった」という状況であった（図8）。

9)研修時間について、「ちょうどいい時間である」が96名の最多（82.1%）であった（図9）。

10)E-learning教材内容が日常の業務へ役に立てられそうか、について、9割以上が「とても／まあまあ役に立つ」との回答であった（図10）。

10)E-learning研修受講にて、参考になったこと、日頃の業務に活かせると感じたことについて、56件の自由記述内容が寄せられた。

11)今後の、障害者への対応についての研修に求めることについて、20件の自由記述がみられた。

D. 考察

今回の調査では、全員が「とても理解しやすかった／理解しやすかった」と回答し、「新たに得る知識がとても多かった／それなりにあった」、「日常業務にとても／まあまあ役に立つ」と回答した人が9割を超えたことから、短時間のE-learning教材であったが、障害者のニーズを想像しながら対応することが可能と示唆された。

今回の受講評価アンケートで、6)、10）、11）の自由記述傾向を探ると、①現場対応の難しさとして、障害の特性によって対応が大きく異なり、コミュニケーションに困る場面が多く、個別対応の難しさが共通課題であった。②コミュニケーションの工夫が重要として、ゆっくり説明する必要がある、視覚的な説明が有効、相手に合わせた対応が必要という、対応スキルが高い領域であることが窺えた。さらに、③精神疾患・精神障害のある患者さんへの対応の難しさとして、状態の変化が大きい、対応に迷うケースが多い、判断が難しい、などあり、対応難易度が高い分野であることが窺えた。障害のある患者さんへの対応は「個別性が高い」、コミュニケーションの工夫が重要、現場で応用できる内容が参考になったという傾向がみられ、実践的な学びとして評価されていることが窺える。研修に関する今後のニーズとして、具体的な対応方法をもっと知りたい、事例をふやしてほしい、実践的なトレーニングを希望する声があり、知識だけでなく実践への研修へのニーズが強いことが窺えた。

令和5年の本研究で開発したE-learning教材は、情報伝達の配慮が必要な視覚・聴覚・知的障害を取り上げたが、令和6年度のE-learning研修実施時でも、精神疾患・精神障害者への対応経験者および、精神障害・精神疾患をもつ方への対応で困難を抱えるなどのエピソードが多かったことが特徴であった。障害のある患者さんへの対応は日常的に発生していることが窺え、職員たちの多くは障害のある患者さんへの対応経験をもつ一方、困難な内容も広範囲にわたっているといえよう。これを踏まえ、今回のE-learning研修内容はわかりやすく、実務に役立つという点では評価されているといえる。

今後の課題として、障害のある患者さんへの愚弟的な対応スキルの強化（実践的支援スキル）が研修にて求められると考えられた。また、精神疾患・精神障害者への対応についての教材開発も必要であろう。また、より多くの医療者が受講できるよう、E-learning教材を更に継続的に普及させる方法を検討する必要がある。

E. 結論

令和5年の本研究班で開発したE-learning教材を令和6年度も継続して実施したところ、短時間のプログラムであるが、障害者のニーズを想像しながら対応することが可能と示唆された。このプログラムはがん医療に限らず、多くの医療場面で活用できる内容であることから、障害者対応研修のE-learning教材を継続的に効果的に普及できるように検討を進めていく必要がある。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

１．論文発表

２．学会発表

甲斐更紗，八巻知香子．がん診療連携拠点病院等の職員への「障害者対応」研修プログラムの継続的な普及方法の検討：E-learning 教材の開発及び受講評価の分析．第 10 回日本がんサポーティブケア学会．2025.5.17-18．和歌山．

H. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

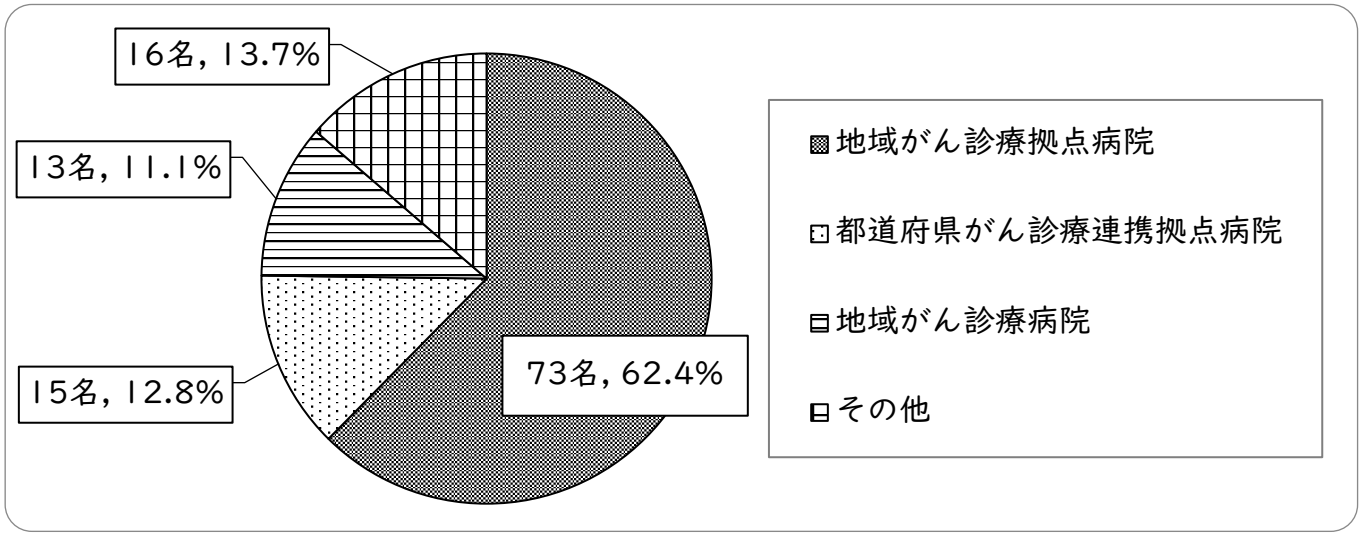


図１　所属機関の種別

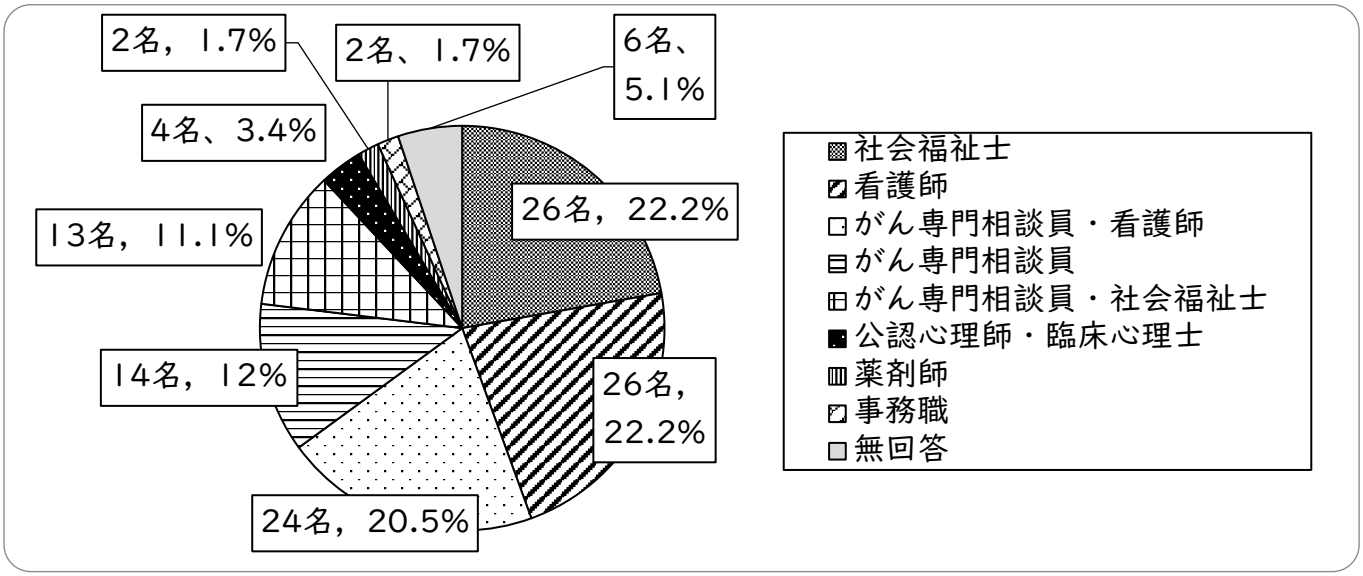


図２　回答者の職種

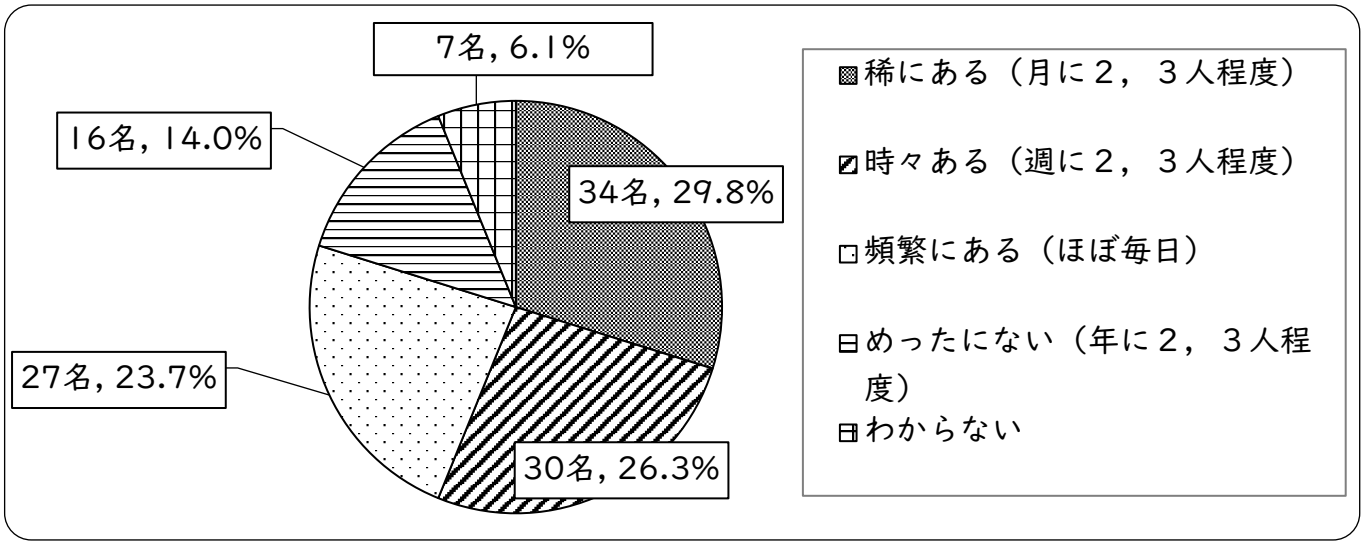


図３　障害者の来院頻度

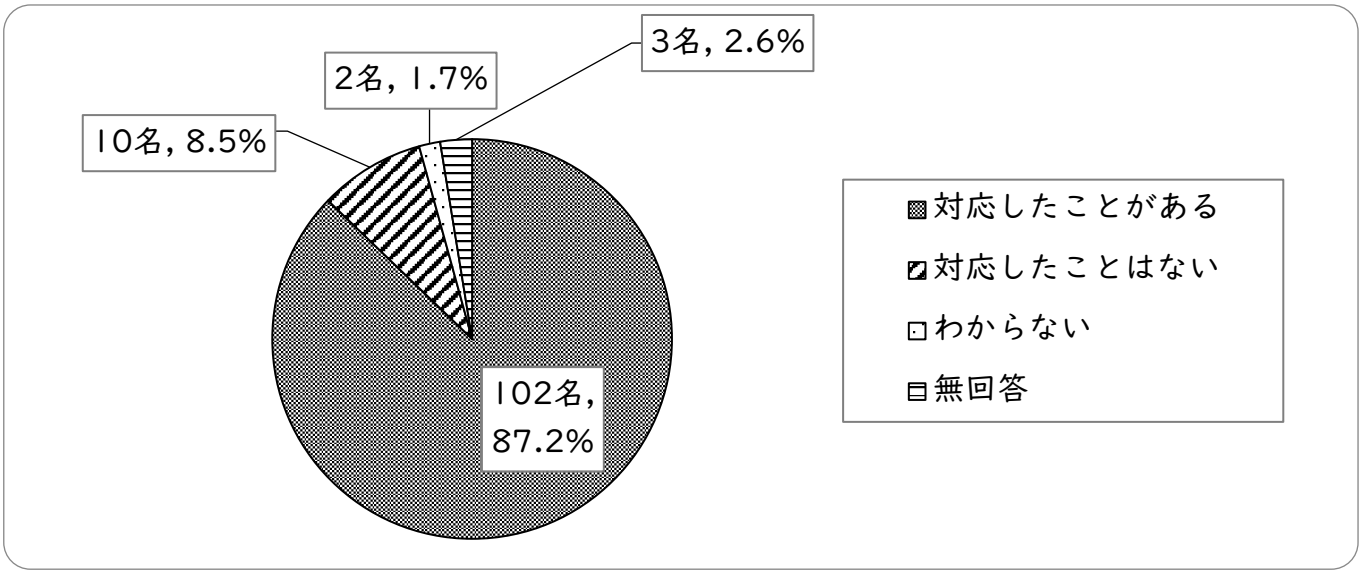


図４　障害者への対応経験の有無

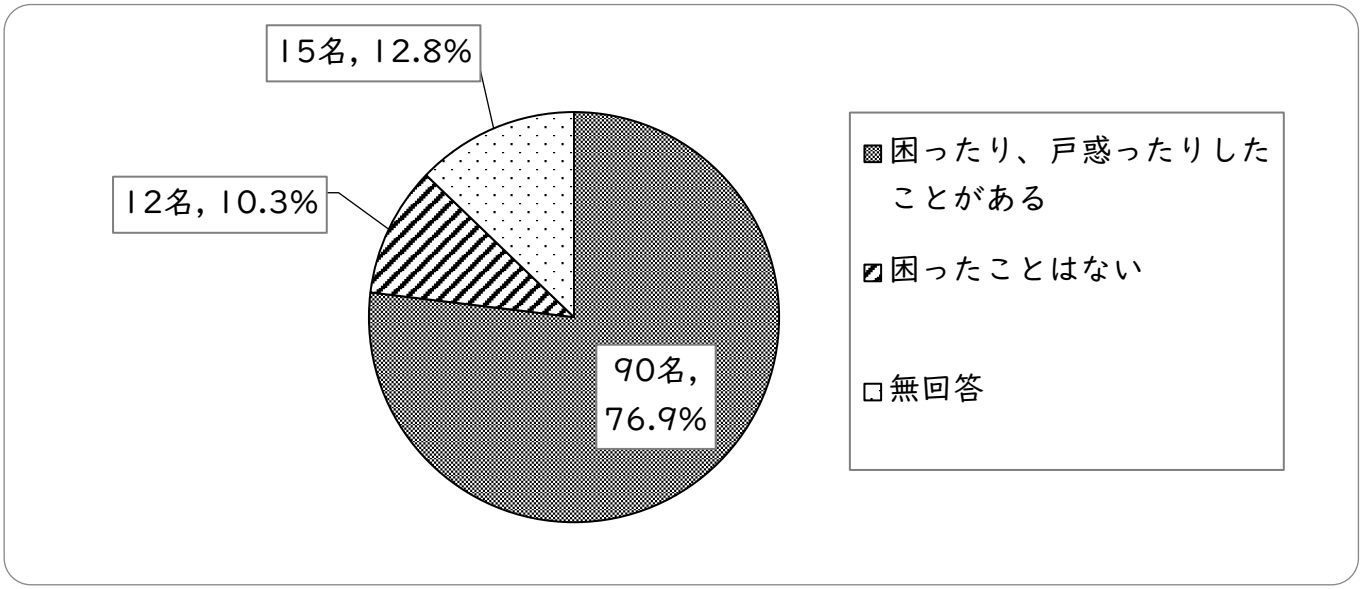


図５ 障害者の来院時で困ったことの有無

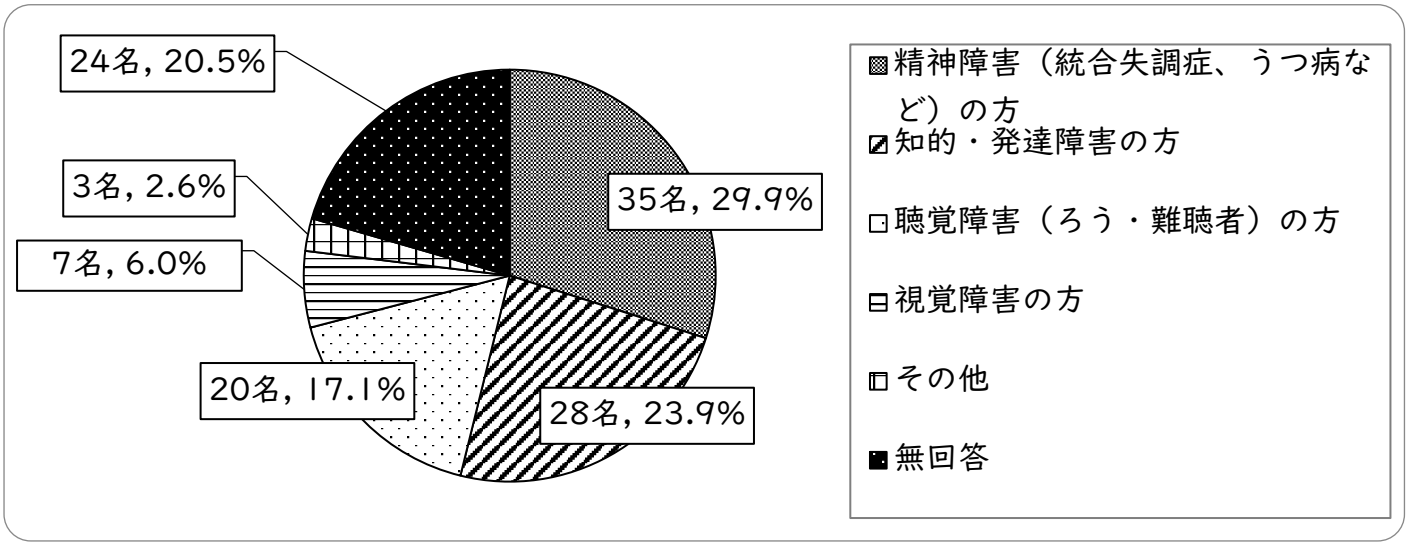


図６　最も対応に困った障害者の障害種

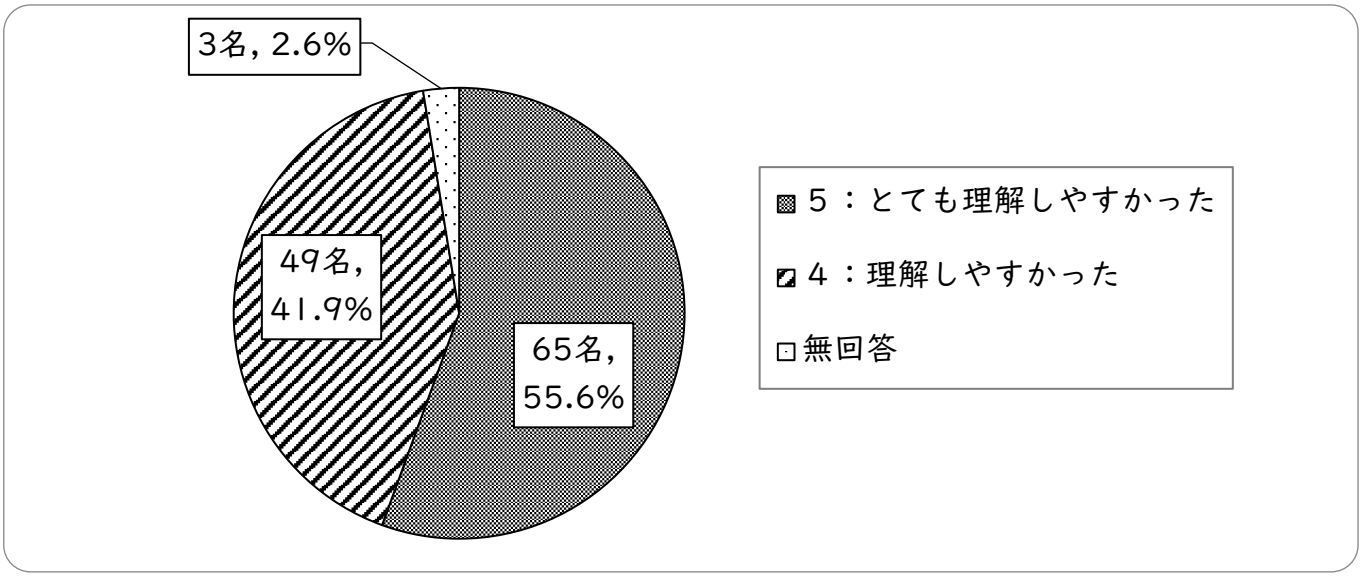


図７　E-learning教材内容の理解しやすさ

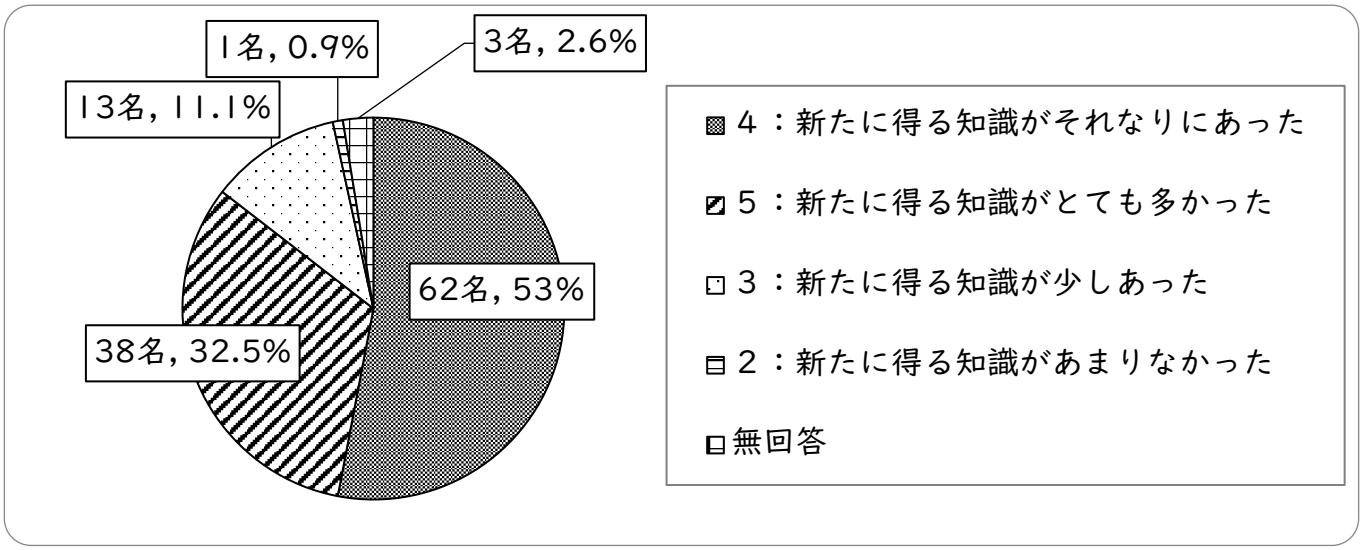


図８　知らないことを新しく知ることができたか

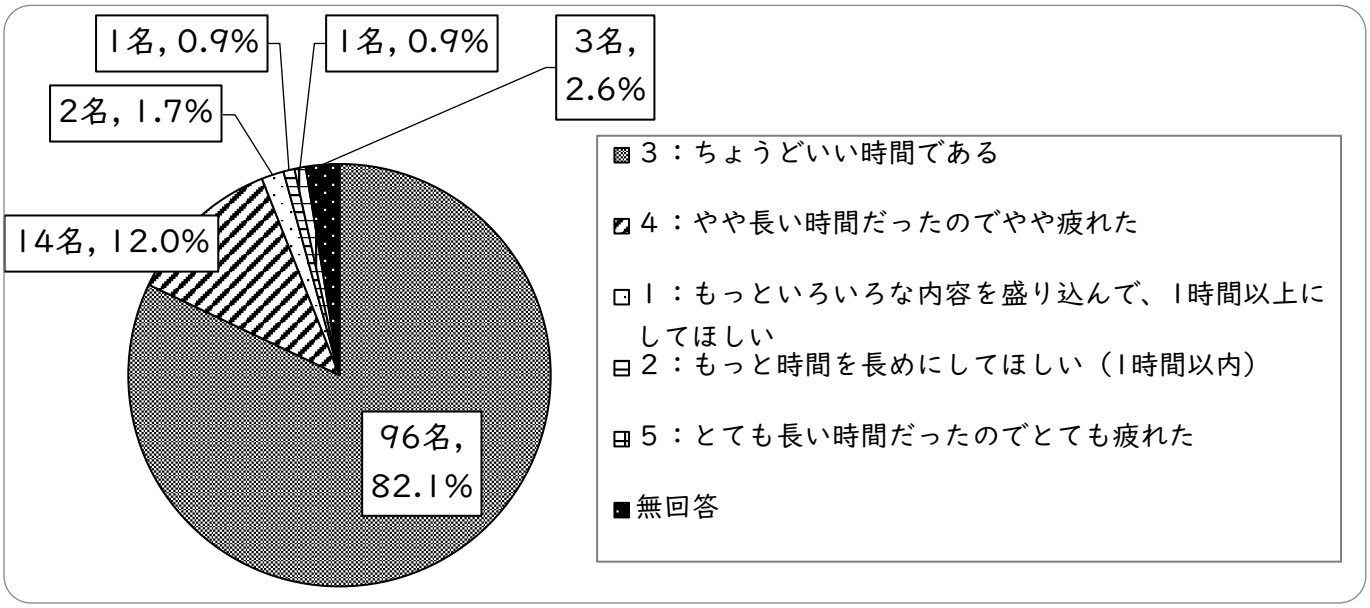


図９　研修時間について

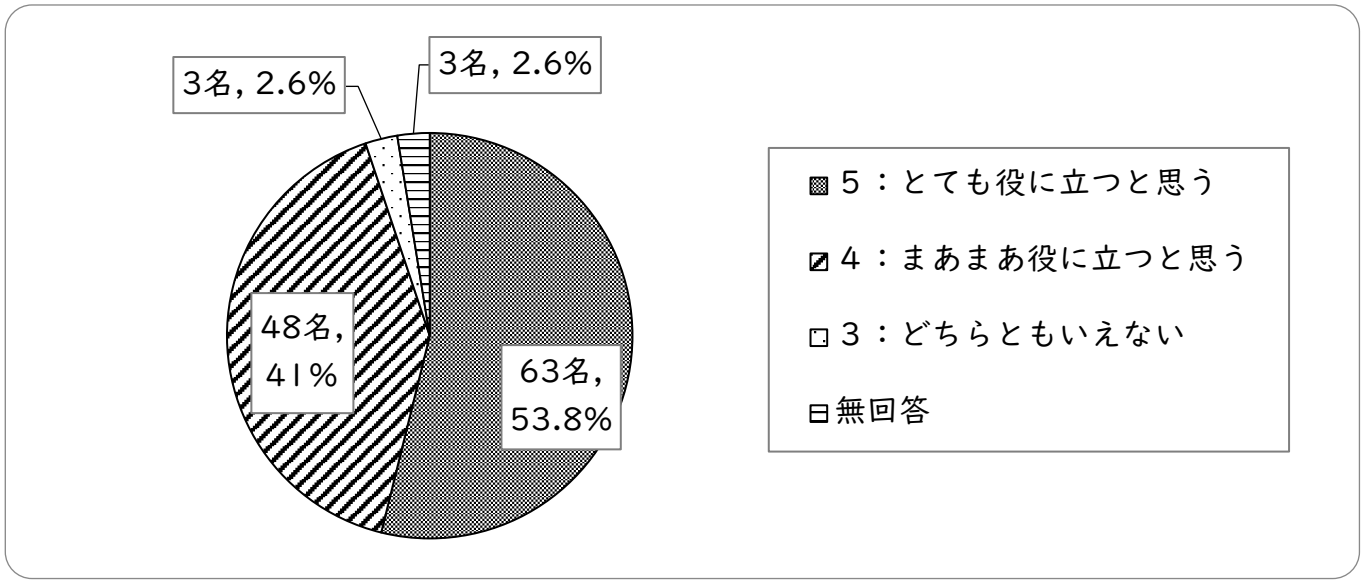


図１０　E-learning教材内容の日頃への業務の役立ち度